

デイヴィッド・シンメルペンニクフアンデルオイエ著
 浜 由樹子訳

『ロシアのオリエンタリズム』

——ロシアのアジア・イメージ、ピョートル大帝
 から亡命者まで——

成文社 二〇一三・六刊
 A5 三五〇頁 四〇〇〇円

本書は、日露戦争を専門とする著者が、ロシアが歴史的にどのようなアジアをイメージしてきたのかという問題を論じたものである。以下では、おおむね各章ごとに本書の内容を紹介する。

序章では、東洋学と文化という本書の分析視角を提示し、ロシアのオリエンタリズムをサイド的なオリエンタリズムの図式に当てはめて議論することの難しさが指摘される。第一章では、ピョートル大帝以前のアジア観を概観する。ステップの遊牧民やイスラームという、ロシアにとつての伝統的なアジアが必ずしも敵対的なものとしてイメージされていなかったことが述べられる。第二章では、後の東洋学の隆盛を準備したピョートル大帝時代を扱う。国益を追求した西欧化政策の実用性とは対照的に、彼の時代の東洋学は非実用的なものであったとされる。第三章はエカテリーナ時代である。彼女の治世は、ロシアが最も自らを西欧と同一視していた時代であり、アジアを「謎と、娯楽と、美の対象」であるにとらえていた。つまり、彼女の時代のアジアとは、ヨー

ロッパ啓蒙主義というレンズを通して見たアジアであった。第四章では、ロシアにおけるロマン主義作家・芸術家を事例に、十九世紀のロシアのオリエンタリズムを分析する。ここでは、ヨーロッパという「自己」とアジアという「他者」を区別しないロシア独特のオリエンタリズムが提示される。第五章では、十九世紀前半のカザン大学が、ロシアのオリエンタリズムに果たした役割を分析する。カザン大学は、ヨーロッパの「自己」とアジアの「他者」を密に結びつけ、東洋学を独立した学問分野として確立したとされる。第六章では、カザン神学アカデミーにスポットをあてる。ここでは、十九世紀半ばに東方研究の中心が首都に移った後も、同アカデミーがカザンにおける東方研究の原動力となっていた点が指摘される。第七章および第八章では、一八五四年以降に東洋学の中心地となったペテルブルク大学をとりあげる。ペテルブルクへの移行は膨張的な帝国の対外政策と密接に結びついていたが、東洋学者自身は、このような体制の関心を必ずしも共有していたわけではなかったことが指摘される。第九章では、ロシア文学史の「銀の時代」、すなわち帝政末期のオリエンタリズムを扱う。アジアをエキゾティックな美にとらえ、そうした要素がロシアに内在するものと考えられていたとされる。終章ではこれまでの議論を踏まえ、ロシアのオリエンタリズムが、ロシア自らのアイデンティティを思考する中で生まれたものであったと結論づける。

訳者が指摘するように、本書の議論そのものにはあまり新しさがあるとは言えない。本書の最大の価値は、長いロシアの歴史にお

ける自己・他者認識の変遷や特徴を個別具体的な事例を通して包括的に提示した点に求められる。歴史的に様々な他者との出会いを経験してきたロシアの歴史を知る上で、本書がその最良な入門書の一つとなることは間違いない。

(長沼秀幸)